

日本建築家協会 関東甲信越支部 公認事業

まちをつくらう！ 空間ワークショップ

公益社団法人

日本建築家協会関東甲信越支部
空間ワークショップフォーラム

まえがきにかえて

まちづくりは ひとづくりから



高田典夫

日本建築家協会関東甲信越支部
空間ワークショップフォーラム



学校教育の中で「建築・住環境」が取り上げられることはほとんどなく、そのことが自分たちの暮らしている「まち」や「いえ」に対して関心を持たない一因となっているように思います。子どもたちの教育を学校だけに任せておくのではなく、地域社会がサポートをすることで、住み続けられる街を考えていく上で、より効果的になるのではないかと思います。そんな素朴な想いから始まった「空間ワークショップ」という活動は15年を超える歴史があり、参加した小学生が1万人をはるかに超え、地域に密着した建築家の活動として認知され、2019年度（ようやく）日本建築家協会 [JIA] 関東甲信越支部公認事業として認められました。

空間ワークショップとは

2種類の長さ（1800mmと900mm）の材木とゴムバンドだけを使い、6～10人の子どもたちがグループで協働してアイデアを出し、自分たちが入ることができる「いえ」をつくり、みんなで校庭に「まち」をつくろうというものです。

この活動は、2003年に日本建築家協会[JIA]関東甲信越支部中野地域会で考案され2003年10月に中野まつりの一つのイベント「公園にまちをつくろう！」として初めて実施され、その後2004年8月に開催された東京都図画工作研究会城西大会で発表した際に、武蔵野市立の小学校の先生方がこの活動に関心を持ち授業としての空間ワークショップの可能性について相談を受け、あらためて授業としての企画を先生方と協議し、2005年11月から2006年3月にかけて武蔵野市の三つの小学校で実施された空間ワークショップから「授業としての空間ワークショップ」が始まり、その後それぞれの担当の先生方との討議などを踏まえて現在の方式に収斂してきました。

空間ワークショップの楽しみ

自分の背丈よりも大きいものを作るという経験は、少なくとも小学校の授業で体験することはないでしょうから、ほとんどの子どもたちが初めての経験ということになります。それも2種類の材木とゴムバンドだけで・・・というわけですから、始まりはみんな半信半疑です。そ

れが時間が経つにつれてみんな眼の色が変わってきます。休み時間も忘れて90分間作り続け、それぞれ個性的な「いえ」が建ち並び、あっという間に校庭に楽しそうな「まち」が出現するとともに、満足そうな子どもたちの笑顔が輝きます。毎年10～20校でこの空間ワークショップを実施して、すでに15年目に入っていますので、参加した小学生は10,000人を優に超え、少なくとも1,000軒以上の「いえ」が建ち並んだこととなります。この数にもびっくりしますが、それよりもっと驚くことは、同じものができないということです。

子どもたちの

想像力／創造力 恐るべし！

空間ワークショップの今後

この空間ワークショップは、建築の専門家としての建築家がその知識と経験を活かして、直接子どもたちに接し、楽しみながら一緒に学んでいくことが特徴で、小学校の先生方からもそのことが評価されています。毎年続けて実施している中で、そのことに加えて、協力することの大切さ、協力するためのコミュニケーションの取り方も知らず知らずのうちに、同時に学べることに気がつきました。

私事ですがぼくの父は長年小学校の体育の教師をやっていて、後年大学で体育科の初等科教育法を教えていました。そんな父が残した著作の中でちょっと気になった文章がありました。

子供が体育の授業に何を望んでいるのか、私がこれまで作文を通して知り得た点から言えば、次の4点に集約できる。

1. 精一杯運動させてくれた授業
2. ワザや力を伸ばしてくれた授業
3. 友人と仲良く学習させてくれた授業
4. 何かを新しく発見させてくれた授業

（高田典衛「授業としての体育」1972、明治図書）

ぼくがこれまで空間ワークショップをやりながら感じていたことは、これら「動く楽しさ」「集う楽しさ」「わかる楽しさ」「伸びる楽しさ」の4つの楽しさに集約されます。

このような活動は、現在ではその活動範囲を多摩地区だけでなくその周辺地域に広げて実施しています。地域とともに行う建築・住環境教育は、そこに住むひとを取り巻くいろいろな事象に敏感に反応できる人を育てていくことが必要です。いろいろな視点で街を見るための基礎知識としての建築・住環境教育は空間ワークショップを通して始まり、継続的な活動により、徐々にその成果を挙げつつあり、さらに広がりつつあると感じています。

まちづくりは ひとつづくりから

この文章は、(公社)日本建築家協会関東甲信越支部城北地域会の機関紙"KNITT #6"の求めに応じて寄稿した文章をもとに、一部、加筆・修正したものです。

目的：

1. 未来を担う子どもたちの環境・建築教育
2. 造形の具体的手法の研究・普及
3. 建築家としての地域貢献／学校教育への参加

効果：

1. 建築環境・空間を自らつくり、体験することの楽しさを学ぶ
2. 骨組の力学を身体で感じ取り、自然界の数学的法則に触れる
3. 構築・解体・片付けという協働作業を通じ、他者と協力する能力を養う
4. 作品の解体と使った部材のリサイクルを通じ、
エコロジー志向の心掛けを学ぶ
5. 街並みの調和に対する意識を生み、皆で共有することの大切さを知る
6. 街や建築の魅力を体感し、明日の美しいまちづくりの担い手を養成する

ねらい（育てたい力）：

1. 「人」＝建築家協会の方、
「もの・自然」＝木材を対象にして、
建てたい家や活動を自らの課題として捉え、
友達と協力して実践する力を育てる。
2. 木材を扱うことによって、自ら考え主体に
判断し、組立てたり試行錯誤したりして問題
を解決する力を育てる。







用意するもの

■角材 | 杉材：節のあまりない小割り材

長材：30 x 21 x 1,820 mm 80本/グループ

短材：30 x 21 x 910 mm 80本/グループ

■ジャンボ輪ゴム：幅 17mm x 1kg /グループ

*) 空間ワークショップフォーラムでは、12グループ分（100人程度）の材料を保有していて、貸し出すことが可能です。

その場合、資材の搬送費はご負担いただけると幸いです。

組立ては「ジャンボ輪ゴム」だけで進めます。

十字に重ねた2本の角材の片方にジャンボ輪ゴムを引っ掛けて、クロスした部分をぐるっと回して、元の角材に戻して止めます。

ゴムは伸びますので、1本の輪ゴムでがっちりと留めることは出来ませんが、フレーム全体のバランスで形を保持することが可能になります。

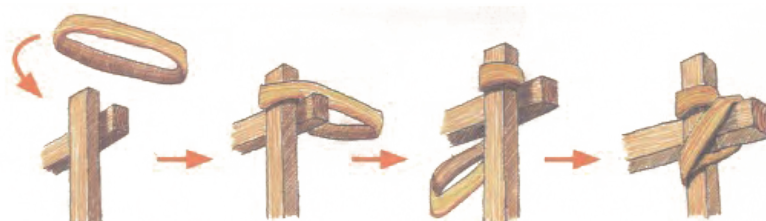
・・・たぶん、一度やってみると、その感覚がわかると思います。

うまくいかないようでしたら、輪ゴムを外して、やり直してみてください。トライ・アンド・エラーです。

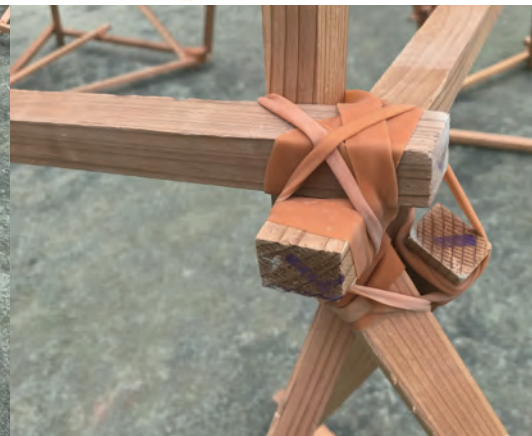
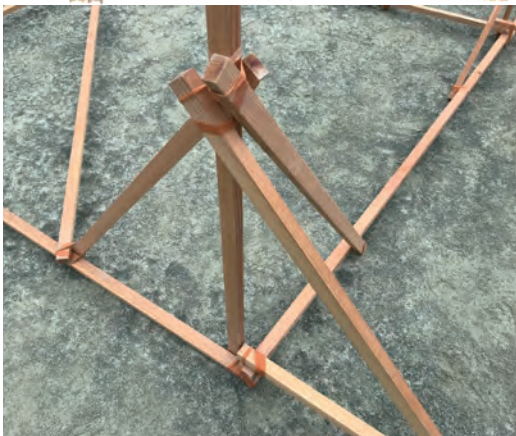
■その他

- ・ 画用紙：1枚/グループ
制作した「いえ」の名前を描く
発表・講評時に使用する
- ・ 布ガムテープ・水性顔料ペン
- ・ ハサミ等の文具・名札
- ・ 子ども用軍手

- ・ 合板：910x1,820 x グループ数
参加者の荷物置き場として使用
→レジャーシート等で代用可

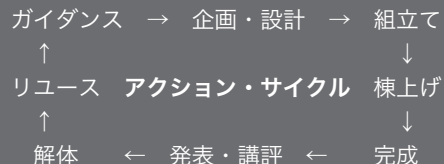


ゴムのかけ方



空間ワークショップのながれ

当日の行程は、それぞれの学校等実施機関のこの活動に対して期待することなど考え方が異なりますので、それぞれ細部では異なってしまいますが、基本的な流れは下図に示した大きな流れを取ります。



はじめて実施する場合、何らかの行程（案）があるとわかりやすいという意見もいくつかの学校等実施機関との打合せの中で頂戴したこともあって、これまでの数多くの実施例を踏まえて、一つの行程例として「行程プロトタイプ」を作成し、学校として事前に考えをまとめる一助にさせていただくことにしました。

実施に際しては、この「行程プロトタイプ」を基にして、学校等実施機関と空間ワークショップフォーラムとの間で行われる事前打合せにおいて決定します。

行程プロトタイプ

時間	内容	備考
9:00	ファシリテーター集合	
9:10	挨拶・ファシリテーター紹介	5分
9:15	組立て方の説明	10分
9:25	製作開始	班ごとに実施
↓	【制作】	
10:55	制作終了	制作時間は、 タイトルを決めて90分
		タイトルを書いてはる
10:55	簡単な片付けのあと 発表・講評	20分 (5分/チーム程度)
		クラスごとに実施、記念撮影
11:15	語連絡	5分
11:20	以降の予定について	
11:20	自由見学	
11:35	つくった「いえ」の中で軽食（おやつ程度）とお茶 ふりかえりも兼ねて	班ごとに実施
11:35	解体についての説明	5分
11:40	解体	30分
12:10	片付け・木材運搬	
12:15	終わりの話	
12:15	ワークショップ終了	児童は教室へ戻り下校
12:15	反省会	

都内の小学校で実施した空間ワークショップの記録から編集した「空間ワークショップとは、どのような活動か？」ということわかりやすく著したものです。

このQRコードからご覧ください。

→





企画・設計

与えられた課題は

グループ全員が入ることができる

『いえ』をつくろう

というもので、グループ・メンバーが最初に集まってすること・・・それは、つくりたい「いえ」のイメージの共有です。

空間ワークショップという活動で行う作業は、個人ではできないことが多いので、グループの中の他のメンバーと協力しなければなりません。そのためは、相手のいうことをきちんと聞いて理解するとともに、自分の考えていることを正確に伝えるということ・・・いわば、コミュニケーション術を高めるということが基本にあります。

このコミュニケーション術を駆使して、まずは、平面的な大きさ（広さ）を確認することから始めましょう。グループ・メンバーがみんな入ることができる大きさ・・・実際に、材木を使ってグラウンドに広げてみるといいですね。その中にみんなが入って、つくりたいもののイメージをあらためて話し合って確認してください。

と同時に、周りをぐるっと見回し、他のグループの様子を眺めて、参考にするのもあり・・・かな？





組立て

たぶん生まれて初めての輪ゴムによる留め方を試みながら立体化していく作業は、何もなかったところに徐々に形が見えて来るというワクワクする体験の始まりです。

と同時に、否応なくわかることは、一人ではできないということです。誰かに支えてもらいながら、輪ゴムで留めるという、少なくとも二人のメンバーでの作業の繰り返しになるということです。

組立ては、このような部分の積み上げで進みますが、その過程で大事なことは「全体を眺める」ということです。部分を積み上げることに拘っていると、全体のバランスへの配慮が疎かになりがちですが、その視点は、全体のバランスをみることで、つくりたいものの全体のイメージをあらためて確認します。

徐々に作りあげて、形が見えてくることで、全体のイメージの修正を図ることもあるかもしれませんが。あらたな技術を身につけることによって、可能性が広がってきますので、自由な発想の転換もあり・・・ですね。自分たちの発想力を思う存分活かして、チャレンジしてみましょう。



棟上げ

間取り（平面）をつくり、柱や壁を立ち上げていくと、段々と空間が見えてきます。メンバーで共有した「いえ」のイメージに近づいたかどうかを確認しながら、作業を進めます。

だいぶゴム掛けにも慣れてきて、アイデアの発想が増えてきたようになり、ますます面白くなってきたのではないのでしょうか？

壁が立ち上がり、自分の背丈より高くなると、次は・・・その上はどうなっていくのが気になります。2階建てにしようか、それとも、屋根をのっけようか・・・選択肢はアイデアの数だけ出てきます。

想いを形にするために・・・

でも、2階建てにしる、屋根にしる、どうやったら自分たちの背丈より高いところで形をつくることできるのでしょうか？

人は羽根を持っているわけではありませんから、空中に浮かんで作業を続けることはできません。想いを形にするためには、ちょっとしたアイデア一気の利いた工夫が必要になります。答えは、聞いてしまえば

なんだ・・・そんなことか！

という程度のことですが、みんなで考えてみてください。



想像 [IMAGINATION] から創造 [CREATION] へ・・・

動く楽しさ
集う楽しさ
わかる楽しさ
伸びる楽しさ



楽しみながら身につく力

完成！

発表・講評

空間ワークショップがただのものづくりのワークショップではないのは、制作の後、出来上がった「いえ」を前にして、その名前の由来や苦労したこと、楽しかったことをみんなに説明して、その発表も含めて、ワークショップの講評を、各グループについていた建築家にしてもらおうということを必ずやるからです。

ぼくたち建築家の仕事では、例えば、

$$1 + 1 = 2$$

というような唯一無二の**正解**というものはありません。

$1 + 1$ が **100** になったり、

$1 + 1$ が **0** になってしまう

こともあります。

したがって、それぞれの場合に最適なものを探しだすこと、そしてなぜその答えがその場に最適なのかきちんと説明できることが求められます。そういう意味で、この発表・講評という段階にこそ、建築を実現するための大切なことがつまっています。

自分の考えたことをきちんと説明できること、他の人たちからの質問・意見にきちんと答えられること・・・それこそが求められていることであり、身につけてもらいたいことなのです。もちろん、最初からうまくいくとは限りません。少しずつやってみましょう。





解体 → リユースへ

今日、みんなが使った材料は、他の学校で、また別の子どもたちが同じように使います。したがって、このワークショップが始まる時の状態に戻して、気持ちよく次の子どもたちが使えるようにしてあげましょう。また使える（リユース）状態に戻して、このワークショップは完了します。



みんなで協力して、時間をかけて作りあげた「いえ」を解体してしまうのは、残念ですが、この「いえ」をつくりあげたということは、みんなの記憶の中にしっかりとしまわれています。

このワークショップで学んだことは、数多くあると思いますが、楽しかったこと、大変だったことも含めて、時々思い出してください。

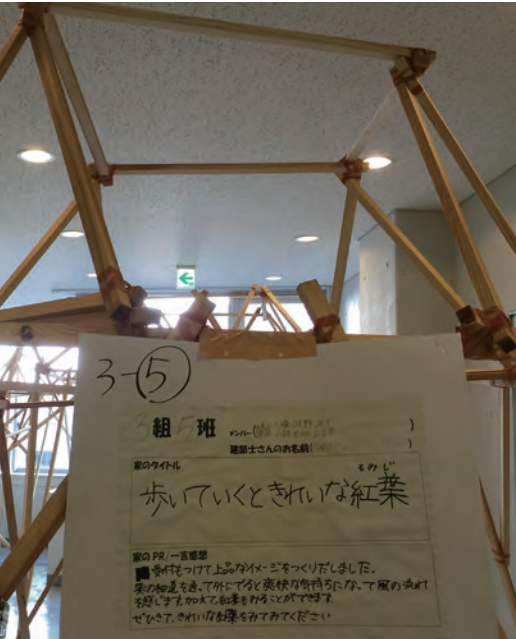




雨天・荒天の場合

雨が降ったり、強い風が吹いたりして屋外での実施が難しいと判断した場合は、体育館等の屋内で実施します。

屋内での実施場所については、事前打合せの時に確認して決定します。体育館が使用できる場合は、それに越したことはありませんが、一般的な小学校の体育館では、9～10班程度の実施が可能です。それ以上の班数の場合は、体育館に加えて、ランチルーム・多目的ホール・特別教室・玄関ホール・廊下などから周辺環境を勘案して選択することになります。



写真（下左）・写真（下右）で取り上げた作品は、体育館から溢れてしまって、割り当てられた制作場所が、体育館脇の廊下状のエントランス・・・幅は狭いし、天井高さは低いけど、そこに蛇のように連なった空間をつくり出し、未知の空間に連続するような不思議な空間をつくり出してしまいました。なんの制限もない場所だったら、決して考えつかない空間が周辺環境の影響で生まれたのです。

環境に制限がある場所での空間ワークショップは、やってみると意外と面白いものです。僕たち建築家が日常的に行っている「設計」という作業は、実は、多かれ少なかれ、周辺状況との戦いなのです。周辺からの刺激に耳を傾けることも大事なことです。

ブレスクーリング (事前学習)

授業としての空間ワークショップは、普段一緒に過ごしているクラスメートとの協働作業になるので、コミュニケーション不足ということはないと思いがちですが、これがなかなかうまくいきません。

そんな中、担当の図工専科の先生から、事前授業をやりたいという話を受けて、思いついたのが、子どもたちは、そもそも自分が住み暮らしている家や街に興味があるのだろうか？ということで、毎日通学する時に見ているはずなのに記憶に残っていない街をあらためて好奇心を持って見て歩き、「いえ」をつくるアイデアを探して、クラスメートと事前にディスカッションして、モチベーションを高めようという時間を作ってみました。

さらに、別の先生から、算数の授業とタイアップした事前授業ができないか、という相談を受けて、考えついたのが、建築物の中に隠れているいろいろな形を探そうというスライド・レクチャーで、そこから建物の中に隠れている三角形の存在とその不思議な力についての話をするとということにしました。

また、学校によっては、実施に先立ち、図工の時間を使って、割り箸と輪ゴムで模型をつくり、建てたい家のイメージの共有を図っているところもあります。



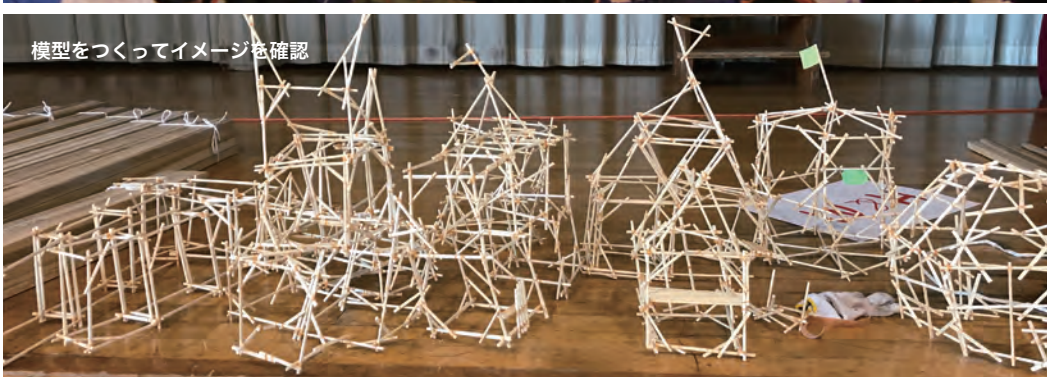
街歩き



作戦会議



体育館でレクチャー



模型をつくってイメージを確認

子どもたちと ともに考える

空間ワークショップを実施する上で、中心的な役割をはたしているのが図画工作専科の先生や主催機関の担当者です。もちろん、担当者一人で全てのことを決めるわけにはいきませんから、校長先生はじめ多くの関係者を巻き込んだ調整が必要になります。たまたま担当であった図工専科の先生が異動になられて、その後任の先生を紹介していただき、開催のお願いに伺った時に、そんな面倒なことはやりたくないと言われたこともあります。・・・が、数多くの学校等で実現できているのは子どもたちに普段とは違った経験をさせてあげたいという先生方の子どもたちへの想いの表れなのです。

建築のプロに直接「いえ」づくりについて教えてもらえること、普段接している先生たちとは違った大人と付き合うこと、それらのもたらすことの積み重ねが、子どもたちの新たな面を見せてくれるだろうという期待たのではないかと思います。そんな先生方の期待は期待として、僕たち建築家にとっても、いろいろなことに気づかされる大切な時間なのです。

兒玉由起子 Kodama, Yukiko

杉並区立杉並第二小学校 図工非常勤教諭

20:04年、空間ワークショップを見学。その場で建築家の皆様をスカウト。以降、武蔵野市境南小学校、武蔵野市桜野小、杉並第一小、杉並第二小において、図工授業として実施。図工専科教諭を定年退職後、非常勤として、後輩の図工専科にこの活動を繋ぎつつある。

空間ワークショップに、初めて出会ったのは2004年の東京都図工研究大会でした。「こんなに面白い活動は、今まで見たことがない！」そう思って最初から最後まで活動を見学しました。そしてその場で建築家の皆さんに来校の依頼をしたのでした。

学校に戻り「6年生の図工の授業」として行えるように時間数の確保等考え、実施案を校長先生に提案しました。一度実施してみると、先生方にもこの活動の良さはすぐに伝わりました。「図工の力、算数の力、家庭科の力、コミュニケーション力等あらゆる力が総合的に発揮される様子」が子供達のいきいきとした活動を通して目の前で見て取れるからです。「建築家の皆さんの子どもの発想を待つ姿勢の素晴らしさ」についても、先生方は見逃しませんでした。

このようにして、私の勤務した学校では、また来年もという声が必要がありました。建築家の皆様と共に実施方法を工夫し深めていくことができたことに感謝しています。

活動は、校庭のどこに家を建てるか建築家の皆さんと子供達の「土地選び」から始まります。朝礼台を取り込んだりモミジの木を庭に見立てたり。日影がよいか日向がよいかなども相談。空間ワークショップという名の通り、広い空間の中での作業です。誰か一人のアイデアだけでなく、全員の工夫が生かされる「大きな空間」というものは気持ちの良いものです。

6年生の建てた家を、黄色い帽子をかぶった1年生が「ごめんください。」と見学に訪れ大きな家に感動する場面は家の完成になくはならない大事なワンシーンです。

6年生は完成した家で、お茶を飲んだり、寝転がったり、それはまるで「ひと時の一家団欒」のようです。

参観した保護者の皆さんは、家を建てる様子を見守ってくださり、家の解体後一緒に、子供達の小割材の束ね作業を手伝ってくれます。

この活動を体験した子供達は、「自分たちの建てた家は解体してしまったが思い出は心の中に残るのだ」という事、「一つの仕事は自分一人だけの力では成し遂げることはできないのだ」という事、そして、学校から帰る道で「家や街並みが今までとは違って見える事」を発見するのです。

建築家の皆様のすばらしく素敵な空間ワークショップが引き継がれ続いていくことを、図工に携わったものとして切に願っています。

西村則子 Nishimura, Noriko

東大和市立中央公民館 職員

皆さんは東大和市をご存知ですか？西武線界隈にお住まいの方はマラソン大会で多摩湖にいらっしやることがあったかも知れませんが、東京の西に位置し東村山市の隣にあります。自然が多く、駅も市内に4つあり、交通の便も良い所で、子育てし易い街としても知られています。市内の公民館職員として従事して15年目です。

中央公民館で夏休み期間中「夏休みみんなでつくる遊空間」というイベントを開催して今年で16年目を迎えました。毎年30程のイベントを、小学生を中心に高校生、シニアまでが世代を超えて共に体験活動しています。サークルや部活で学んでいる事を子ども達に体験してもらい、そのサポートをし、最後に参加者全員で成果を発表し合うイベントです。

空間ワークショップ「まちをつくるう」は、十年以上前、実行委員さんのご紹介で高田先生と出会った事がきっかけで始まりました。初期の頃は割り箸と輪ゴムで小さな町を作っていました。子ども達がそのお家をワッセワッセと持ち帰る様子が今でも懐かしく思い出されます。

その後高田先生から、小学校で行っている空間ワークショップのお話を聞いて是非実現したいと思いました。試行錯誤で開催にたどり着くと、多くの子ども達から申し込みがあり、たちまち人気のイベントとなりました。

学校が主催の時と違い、小学1年生から高校生、保護者のお父さんと、建築家の方まで立て割りのグループで1つの家を仕上げるのが遊空間の大きな特徴だと思います。プロの方から見ると小さい子どもの対応は大変だったと思いますが、本当に家を作るおじさんや、普段接する事の少ない高校生のお兄さんと一緒に作業する事はとても楽しい事だったと思います。低学年の子どもが一人前に扱ってもらえ、皆と共に設計図を描いたり、自分なりにできる事を考えたりと、その誇らしい気持ちが伝わり何とも可愛い後ろ姿でした。梯子や扉を考えて作っては、それを家の一部に着けてもらうと「これ僕が考えたんだよ。おじさんがつけてくれたよ！」とうれしそうに報告してくれました。また高学年の子達は、小さな子どものできる仕事を探しては、声掛けしたり、夢を実現できる建築の仕事にわくわくしたり、高校生も手の届かない子どもを抱き上げて作業したり、大人同士で重い屋根を組み上げたりと貴重な体験をしており、最後の感想では、「初めての事で戸惑ったが出来あがった時は感動した。来年も参加したい！」というものばかりでした。

このプロジェクトにかかわるすべての人が、その立場で体験学習できる最高のイベントだと毎回実感しています。

高田先生、この場を借りて溢れる感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

本当にありがとございます。

井口佳子 Iguchi, Yoshiko

中瀬幼稚園 園長

ヒトが生きる環境には、虫や動物や植物など、あらゆる生き物も生活をしていて、ヒトはその環境を使わせてもらっているのだということに気がつく園庭の主。たまたまお会いして意気投合し・・・空間ワークショップだけでなく、子どもを取り巻く環境や子どもの教育について語り合っています。

空間ワークショップ???. . . 取り敢えずいらしてくださることになった。

予備知識なく集まった参加の幼児、小学生、父や母が見守る中、到着のトラックの荷台から材料が現れた。皆この材料に釘付けになった。長さ21×30×900mmと21×30×1800mmの角材の束と太い輪ゴム。沢山の参加者に対して材料がこれだけ??. . .

何が始まるんだろう。皆興味津々であった。

幼児、小学生、大人が混じった幾つかのグループ。年齢差が大きいグループができるのは他のワークショップでは少ないかも知れない。大人のアイディアが先行して作られていく空間で、子ども達が大喜びしているグループ。子ども達が考えたアイディアを大切に、大人が仲良く手助けしていくグループ。全体の形には関心が無く、ひたすら自分の場所作りに精を出している幼児達もいる。久しぶりの面白い空間で特に夢中になっていたのは、小学生と少年時代に戻ったお父さん達かも知れない。

思い描いた形がなかなか作れなかったりすると、高田先生のお仲間の建築家の方が、「こうするといいよ」と声をかけてくださったり、子どものやりたいことは何か？を見抜いて、又その方の個性の味付けも加わって絶妙なアドバイスで更に面白くそして思いがけない方向へと発展していく。この角材の大きさには考え抜かれたプロセスが窺える。扱い易いシンプルな素材は奥が深い。

高田先生は時々園にいらして話してください。「授業が面白くないのは、面白くしようと工夫しないから」という言葉。わたしが実践女子大の非常勤講師をしていた時、段ボール素材の授業に先生をお招きしたことがある。「壊すことは新しい世界を作ること」忘れ難い言葉だ。

ワークショップの後の片付けの分かりやすさと素早さ！夜空の花火は一瞬で消えるが目に焼き付けられる。みんなで作った形も、残らず片付けられて何も残らない。しかし、この時間と空間は心にしっかり心に残る。

10年程前イチョウの葉が美しく色づいた秋日和の中、第1回目空間ワークショップの日のことです。

その後、子ども達の遊びの中になんとなく立体が感じられるようになった。再開される日を待ち遠しく思います。

峰尾幸仁 Mineo, Yukihito

東京都公立学校美術科・図画工作科教諭

八王子市立由井第二小学校で2015年から5年間、毎年6年生の図画工作科・総合的な学習の授業『家を建てよう』として実施。

高田先生と空間ワークショップとの出会い

2015年夏、東大和市で行われた「空間ワークショップ」へ私的に初参加。高田先生をはじめ建築士のプロ集団によるご指導のもと、想像を遙かに超える大きさと、どんどん形作られる感動の造形活動を体感させて頂くとともに、高田先生の「空間ワークショップ」への情熱に魅せられた素敵な出会いでした。

魅力的な造形活動や人とのかかわり方・小学校の図画工作科や総合的な学習での教材化

「空間ワークショップ」の内容は、学習指導要領図画工作科の目標に向けて魅力的な授業ができると考え、題材名を『家を建てよう』とし、授業指導案を作成した。

事前授業の設定

自身の体験から、「空間ワークショップ」に向けてのワクワク感を児童にもたせたいと考え事前授業を行った。

- ①建物（家、ビル、橋）の画像を見て活動の造形的キーワード建築構造の魅力に気づかせる
- ②割り箸を使って個人での造形活動

③できた作品を鑑賞し、感じたことを発表。

④「空間ワークショップ」に向けて、活動グループごと家の形などについて意見交換（ワークシート）

事前授業では、高田先生にお話しして頂くとともに専門家の目線で授業内容を確認して頂くその後、高田先生から「事前授業は、お任せします」のお言葉は、私の自信になりました。

児童の感想

毎年『家を建てよう』を見ていてとても楽しみにしていました。やるにつれて全然違う形になっていってそれがすごく面白かった／とてもいい体験になったと思いました。その理由は、みんなとの協力だったり思いやりが伝わったからです／やる前は建築のことなんてあまり考えたことがなかったけど授業をやった後は建築が楽しいと感じました／協力してやるのがとても大切だとわかりました。それにプラスして峰尾先生が言っていた『協働』という意味がわかりました。そして、今日は、輪ゴムでとめる時、教えてくれたり『君、とってもがんばっていたね』と声をかけてくれてありがとうございました

感謝

日々大変お忙しい中、ボランティアでの参加。そして、学校教育や教科のねらい、各年度の子どものたちへの思いなど、しっかり理解していただいてのご指導。高田先生・建築士の皆様、本当にありがとうございました。





空間ワークショップフォーラムとは・・・

「空間ワークショップ」は日本建築家協会〔JIA〕関東甲信越支部中野地域会が発案し、2003年10月に中野まつりで「公園に『まち』つくろう」というイベントで実施したのが始まりです。その後、2005年に武蔵野市立の三つの小学校で「授業としての空間ワークショップが始まり、現在に至っています。その間、小学校の先生方、保護者の方々や参加した建築家のみなさまの様々なご意見をいただき、それぞれの地域会で地域に根ざした活動として広がってきました。この「授業としての空間ワークショップ」の実施には、時間割の調整など担当の図画工作科の先生だけでは実施することは難しく、校長先生中心となって動いていただいている図工科の先生が異動され、今まで実施してきた地域を離れてしまい、別の地域会担当地区になってしまうという事例も出たりして、地域会という枠を超えたサポート体制が必要となってきました。そこで、この度、継続的に実施してきた「空間ワークショップ」という活動を実施・サポートするために、地域会の枠を超えた横断的プラットフォームを整え、「空間ワークショップ」の実施及び更なる発展に寄与したいと考え、「空間ワークショップフォーラム」という活動基盤をつくることにしました。

これまで「空間ワークショップ」を実施してきた地域会の関係者のみなさまにご理解いただき、開催に関するスケジュール管理、ファシリテーターの募集・調整、資材の保管・補充・搬送など、これまで各担当地域会がそれぞれの担当地域で行ってきたことを一元管理できるようにすることで、実施主体である小学校及び関係団体と、これまで以上にきめ細かい連携が取れるようになり、この「空間ワークショップ」という活動がさらに継続・発展していくものと考えます。

公益社団法人

日本建築家協会関東甲信越支部

空間ワークショップフォーラム

設立世話人（五十音順）

小池正人 | 中野地域会

桜本将樹 | 神奈川地域会

事務局：鈴木和貴 | 城北地域会

代表：高田典夫 | 三多摩地域会

長井隆志 | 世田谷地域会

藤沼 傑 | 神奈川地域会



不許複製
禁 無断転載

発行日： 2021年11月3日

発行：公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
空間ワークショップフォーラム

連絡先：空間ワークショップフォーラム

代表 高田典夫 | 三多摩地域会
090 3912 5620

norio.takata@gmail.com

事務局 鈴木和貴 | 城北地域会
090 2544 6297

suzuki@paxkenchiku.co.jp

URL <https://www.facebook.com/n2taka>



編集：日本建築家協会関東甲信越支部
空間ワークショップフォーラム
担当：高田典夫

ブック・デザイン：高田典夫

写真：日本建築家協会関東甲信越支部
空間ワークショップフォーラム

映像撮影：川村剛弘 | クリエイティブアイズ

編集：川村剛弘 | クリエイティブアイズ

イラストレーション：小池正人

テキスト（署名文以外）：高田典夫